

## 私の実践的英語教育論

森 谷 峰 雄

は じ め に

1. 中等教育の英語教育について
2. 大学の一般教養課程としての英語教育について

は じ め に

余りにも貴重である、この大学外国語教育の授業を一時的な興味本位の内容に終始するには、この一度しかない一生、しかも、人生の最も受容力に富んだ青春に単に外国語のみを学ぶ、あるいは私にとっては教えることの損失は測り知れない。私自身、今までの外国語教授に対して深い悔いを残している。今からはそうあってはならないと腰に帯して、気持ちを新たにす。

考えても見給え、何故太陽があるのか。何故、地球に命があるのかを。これらの物事を本当に認識するならば、人は絶対者の存在に気付き、その前に厳粛にならざるを得ない。人生の危機的と言われる青春にこの真理について考えないで、本当の人間にはなれまい。

大学の一般教養科目こそ、狭い専門科目に対して、この一大真理を考え、追求するのに最もよい時と考える。

幸いにして、大学課程は中学、高校とは異なり、広く人生の真の意味を探る時間を提供している。この与えられた機会を教える者も真剣に、又、教えられる者も真面目に、十分活用したいものである。私はこれから数年間に述べた理念で外国語教育に捧げようと決意する。この理念を理解していただきたいと願う。

筆者のこのような大学英語教育理念に一つの根拠を支えるのは安藤昭一教授の「私の夢」(J A C E T 通信No.47巻頭言)である。この中で教授は21世紀に向かう日本における大学英語教育の重要な方向を語っていると思われる。安藤教授は夢を見る。その中で一つの禁止があった。それは訳読主義授業であった。それに代わるのは「意味に関する質問を受け、必要に応じて訳もするが、授業の中心はテキストの内容に関する、英語(または日本語)での活発な討議である。そして、ときどき討議内容に関する英語のshort essayを宿題として課する」ものである。これは一口で言えばテキストの内容中心主義であろう。これは真に教養英語の名にふさわしい。1時間に何頁というのではなく、1週間に数10頁下読みさせて、授業で内容を討議する。この効果は大きい。読む英語の量が格段に多くなる、知的刺激を受けてその発達が期待され、学生の品性も向上する。しかし、これにはテキスト以外に、その精神的基礎を導入する参考書が必要となろう(特にテキストに文学作品を選択する場合)。それは教師が作成したものに限ろう。何故ならば、教師が自分の学生に応じて、しかも自信のある内容を伝えることができるからである。これによって、大学の英語教育は大学の教育らしい、香気の高いものになろう。これを安藤教授流に言えば「TESOL や Applied Linguistic と、英米文学研究、日英文化比較研究、英語学・言語学研究、その他を総合して止揚した、次元の高い大学英語教育が創造され」る、ということになろう。そのためには安藤教授も述べておられるように、「強制措置によってではなく、お互いの自主的努力によって、ここに述べたような大学英語教育を実現させたい」のである。〔訳読主義について『研究成果報告書—大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(Ⅰ)—教員の立場—』(大学「一般英語」教育実態調査研究会、研究代表者小池生夫)は憂うべき実態と将来像を示している(89頁)。〕

次に日頃筆者が一教育者(教師)の文字通りはしぐれとして外国語教育について、日頃くすぶりつつあったものの一端を吐き出してみたい。(以下『鷹陵』(第97号)に掲げたものに加筆したものであることを断っておく。)

筆者は去年(1982年)7月27—30日にかけてソウル特別市の培花女子大学<sup>ペフ</sup>—この大学は元朴大統領夫人の出身校、ミッション系の大学で職員室では彼

の肖像が飾られていた一で行なわれた第二次国際学術大会（韓国英語教育学会，韓国文部省主催）に出席し，韓国，米国，日本の英語教育についての講演，討論，研究発表を聴聞した。それにしても我々東洋人の英語の発音の悪さには失望した。会場で知り合ったソウル特別市の高校の教員をしている友人は，大学の先生（彼は同国人のことを言っていたのであろう）の発音の悪さにあきれていた。確かに，それは否定できなかったと筆者も思う。それはともかく，この一連の発表会において筆者にとって重要と思われたものについて，彼なりに考えたことを述べる。

### 1. 中等教育の英語教育について

まず，中等教育の英語教育について。現在，多くの英語教授法が百花繚乱しややもすれば，教授者の側に多少の混乱が生じる可能性が多いと思われる。筆者は中等教育の現場に居合わせた経験がほとんどと言っていい程ない。確かに，彼が昔少しの間居た(旧)東京教育大学附属中学校の英語科では，その道の優れた指導者が居り，理想的と思われる指導が行なわれていたと思われる。その英語科の職員室に備えてある指導教材・教具，辞典，又，訪ねてくる生徒達と教員の間の真剣な会話や態度から，良い雰囲気が流れていた。もちろん，ここにも違った困難もあるであろう。しかし，日本のすべての中学校がこのようであるのではない。

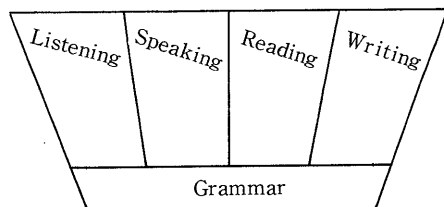
いわく，文法訳読式，直接式，オーラルアプローチ，GDM，あるいはトータル・フィジカル・レスポンス（Total Physical Response）等々。これでは教科教育法を講ずる者も，現場で指導する教師も，あるいは英語の教師になろうとする者も，諸説に迷わされて，いずれが自分と現場に本当に適した教授法であるかを見極めるのが難しく，結局，自分が教わった方法で教えるのが実状ではなかろうか。又，一つの教授法を完全に習熟する機会も乏しいのではないのか。この故にこそ，教育大学院が設けられているのだが，それも一般的でない。理想を以って教育界に飛んだものも時には挫折するであろう。こうなれば1人の情熱的な英語教師が現われて現状を打破するのを期待する以外に方法はないのか。

入門期の英語指導は最も重要で、困難であり、教授法の多くはこの時期の指導に主なねらい定めているように思える。この大会で、特に筆者の興味を引いたのはトータル・フィジカル・レスポンスであった。これはソンヤング英語学校 (Sogang Institute for English as an International Language) のローダ・カーティス (Rhoda Curtis) 女史、大阪外国語大学のトム・ペンダーガスト客員教授 (Prof. Thomas M. Pendergast, Jr.) などの人々が実践している方法で、一種の口頭言葉による条件反射を利用して口頭言葉と動作を直結して言語を認識させようとするもので、文法を知らなくとも、言葉を理解させ、それを発するようにさせる。これによると、英語だけでなくどんな外国語でも習わせることができる。それにはその言葉に習熟した教師、指導者が必要である。しかし、この方法も入門期の指導に利用されるものであって、抽象的概念を学ぶ上級生には不適當であろう。

次に英語教育 (学習) における文法の役割について考えてみたい。上のような教授法において一もっとも直接式教授法共通のことであるが一文法は直接役立っていないように思える。しかし、動作と口頭の言葉を通して、文法を帰納的に覚えて (指導して) いくのであって、文法はやはり学ばれている。この意味で文法は言語の習得には必須の知識である。文法を知らないで話せるのはきまりきった表現—たとえば、ホテルのフロントマン、案内人などが用いる言葉—、日常会話の用足しに必要な表現だけであって (これについて、講演で南カリフォルニア大学教授、Robert B. Kaplan も興味深い話をしていた。今ここではこれに触れない)、自分が考える思想を伝達したり、相手が語り、書く内容を理解するにはその言葉の規則—文法—を知らなくてはならない。

即ち、所謂四技能、聞く・話す (学習指導要領に言う目標(1))、読む (目標(2))、そして書く (目標(3)) には文法が駆使されていると言ってよい。大会当日発表された韓国の慶北大学校教授、葵俊基氏もこの点を強調しておられた。日本人が英語を学ぶ場合、或いは教える—Teaching English as a Second Language, TESL—場合、最も効果的な、必須の知識は文法である。葵俊基教授は次のように図示する事、文法といっても最近筆者などが昔、高

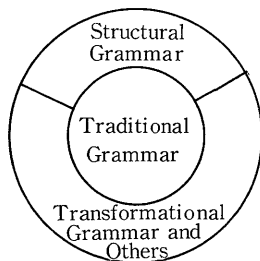
校や大学で習わなかった構造文法、変形文法－理論文法－が発達してきた。筆者などはこれらの文法を見ても興味が持てない。非常に簡単な事柄をわざわざ分かりにくく説明し、しかも、必要もないと思われるような説明がある。しかし、今はこの文法も少しは理解する必要があるだろう。筆者らが学校で習っ



※cited from "In Search of English Grammar for TEFL"  
by Chae Joon-Kee Kyungpook National University, July  
28, 1982, p. 1.

(上図は発表当日配布された資料に記載されたものである。)

た文法は所謂学校文法、即ち、規範文法である。何といっても伝統文法は民族の文化の基礎である。これを否定することは不可能で、理論文法がこれに代わろうとするならば、それは愚かな試みであろう。後者は前者から派生しているものであり、それを命としているからである。英語学界ではこのことが現在認識されつつあると聞く。人類が如何に言葉、文法を創造したかを研究する学問は確かに万人に興味のあるものであろう。その過程を解明し、外国語教授法に適用する可能性も残されていよう。葵俊基博士はあるべき文法の内容を次のように図示している。



※ cited from Chae Joon-Kee *op. cit.*, p. 4.

学習文法(Pedagogical grammar)は伝統文法を中心に理論文法をその周辺に加えたものとなる。学習文法は言語学が獲得したものを取り入れて充実させていくことは他の教科と変わりはない。しかし、言葉という保守的性格が強い教科は閉鎖的になり易く、他の教科のように学問の進歩に対して開きにくい面もある。葵俊基教授の説はこれに警告を発したもので、妥当な意見で、日本の教育界・学界もこの筋を進んでいると思われる。

文法は、しかし、言語教育の目標ではない。けれども、うまく文法を教えるとき、言語教授の近道となり得る。しかも、この文法教授の基礎は伝統文法にすると葵教授は強調する。

中学・高校の側から、今の大学入試の英語の実体が変わらない限り、日本の英語教育は改善されない、と主張されて久しく、J A C E T (大学英語教育学会)でも「大学入試改善の基本的見解の表明」を行った(1969年11月12日)。それを今ここに掲載して見よう。この見解は語学教育研究所、語学教育振興会(C O L T D), 英語教育協議会(E L E C), 語学ラボラトリー協会(L L A), 全国英語教育研究団体連合会(全英連)及び貿易研修センターの統一見解であるという。

### 将 来 の 改 善 策

1. 中、高、大の一貫した英語教育をめざし、大学の入試が高等学校ひいては中学校の英語教育をゆがめることのないように、中、高側の意見を十分に斟酌して入試問題の改善に努力すること。
2. 高等学校よりの調査書を重視すること。
3. 外国語学習に対する適性を測定しうる方法も加え、入学後の教育に資すること。

大学入試が中学・高校の英語教育をゆがめている実状を知らなければその改善を図ることはできない。つまり、高校は大学に合格できるように、中学校は高校に合格するのが目的とされる。ところが大学のほとんどの英語の入学試験には聴解能力とか話す力を評価しない。筆者はまだ日本の大学全体の英語入試方法を調べていないので、この言い方は正確でないかも知れない。今これを行っている大学もあると聞く(たとえば立教大)。これは明らかに文

部省の外国語学習指導要領に則って教育に携っている高校の側から言えば大きな欠陥であろう。即ち学習指導要領には目標(1)に「聴く・話す」があるのである。今までこの欠陥が無視されてきたことに筆者自身が驚いている。もし、このような無視が持続されるようならば黙っている訳にはいかない。大学自身の中・高の英語教育を壊して平然としている。もっとも例外はあった。昔でも一橋大・東京外国語大、東京教育大学英語英米文学専攻にはちゃんと聴解能力を評価するテストを出していたのである。この大会に於いても、ローダ・カーライス女史も同じような提案を行っていた。これは主に韓国、タイ、日本などの東南アジアの英語教育についてであるが、もし大学がその入学試験に聴解能力を課すと、大いに改善されるであろう、と大学関係者を叱責する調子で語った。女史はトンガクという架空の神話の国のたとえを話された。

トンガクの政府が改善された方法で外国語、特に英語を教える教師を訓練することに決定した。現職の課程が設けられ、1年の単位の予算で政府によって費用の支払いが引き受けられた。毎年、予算が激烈な論争の話題であった。決定は最後の瞬間まで延期された。教師は授業を受けるのに手当が与えられ、休暇の間は授業を受け持つことに決定された。それ故、現職訓練のプログラムの参加は特権とみなされる一方、それは又複雑な祝福でもあった。トンガクの教育家達は指導者や創造的思想家や革新的な教室の先生を訓練したいと言う。教師が生徒達に独学の動機を得、学生に学問への愛を創り出すように鼓舞して欲しいと言う。トンガクの文部大臣はすべての教師が再教育されるべきだと命令した。彼は彼らに外国語教育の新しく改善された教授法を学ばせようとした。専門家が招かれ、多くの研究プログラムが行なわれた。勧告がなされた。しかし、高等学校又は大学の入学のための国家試験には何の変化もなされなかった。外国語教師の免許状を出す大学などは実習を行うのに何をも変えなかった。教師訓練プログラムや新しい教材や新しいプログラムに巨大な額のお金が注がれた。現状のプログラムには何の財政上の計画も設けられなかったし、その組織内部で昇進の取り図らいも設けられなかった。その結果はどうなったか？行き所のないエリート、即ち訓練された教師

の一回を産んだだけであった。この費用のかかる再訓練制度ができて10年の後、トンガク国の文部大臣は10年前に発表したすばらしい目標と方針が満たされていないことが分かり、彼は辞職した。女史はこのような架空の国の話を出して、このような事態は米国、ベルギー、ノルウェー、オランダ、日本、台湾、そして韓国にもあり得る、と述べている。<sup>注6</sup>

女史が主張するのは入学試験の改善や現状の制度内の向上、矛盾の解消を図らないで、いくら立派な制度を別に設けても効果がないということである。最近、日本にできた教員養成学部の大学院や現職教員の再研修に力を入れた教育大学、特に後者がこの例にならないとも限らない。以前に朝日新聞は、「教育のひろば」で「教員養成学部の大学院の実情は」という題で、この危惧に少し触れていた（1982年4月20日朝刊）。カーティス女史が指摘したのとは異なる悪い面がここでは出ているようである。たとえば、大学院を出ると中高の先生になりたがらない、英文学を教えたがるが教科教育法は担当するのをしる、現職教員を忘れて研究者になりたがる、中学の教員は高校の教員になりたがる、国家が金を全額出すと、金が出るために集まってくる学生が多くなり本来の目的から外れる恐れもある、等々。（以上は岡山大学教授片山嘉雄氏が語られたもの。）

## 2. 大学の一般教養課程としての英語教育について

私の卒直な意見を言えば、大学の英語教育とても、大学の教育であるから、画一的に統制すべきでなく、研究者たる教員の自由な考えに基づいて、教育的信念を以ってなさるべきであると思う。教える者が語学的な堪能を学生に養成することを目標にするならばそれに基づいて教育すればよい。又、教師が広く教養的な素養を養うことを目的にするのであれば、その目的に沿って確固たる信念の下でなされるべきであろう、と思われる。社会に役に立つ英語とか企業の側に立って教育しようと思う教師はそうにするればよいのであって、教師の自由な教授活動を妨げてはならない。そこに、学問の自由がある。従って、大学の英語教育は社会に対して責任を負う前に、まず教師の教育的信念に対して忠実でなければならない。そこにおいて、社会から批判



を受けてもそれは致し方がないであろう。大学の教師は何も社会の利益になるから教育を行っているのではなく、学問的興味を満足させるために教育を行っているからである。英語教育についても同様である。教育者は百年の未来、否、永遠を目標にし、企業者は10年の未来を予測し得ないならばやっつけいけない、とソウル駅から大邱まで一諸に列車に乗り合わせた韓国の若い実業家が私に語った。教育は永遠に変わらない真理を、価値観を、人生観を教えることでなくてはならない、と彼に悟らされたものであった。語学教育に於いてもそれを生かし得なければならない。単語や文法や表現は忘れられるかも知れない。しかし、永遠の価値は減びない。学生がいつまでも母校を思ってくれるのはそこにこの真理が教えられているからであろう。もし、そんなことがない大学ならばない方がよい。語学教師はそのような高尚な教育理念を荷っていることを忘れないでいたいものだ。

教育は100年否遠永性に指向しなくてはならない。これを語学教育の理念としてもそれを如何に実践指導していくかは至難の業である。このような悠長なところに教育界・現場に精神的弛緩が生じるであろう。しかも悪いことに、そうあってもその結果が判然とするのは何百年先というのでは余りにも、長すぎる、と考えられないだろうか。しかし、教育とは本来そういう長い持続性を持つものであるから、それだけに非常に重大な責任を負っていると自覚されねばならない。そのように考えると、毎時間の授業が永遠性に係わっており、一刻たりとも無駄にできない。

これに似た考え、教育の瞬間性についてNHKの教育番組で、日本のどこから有識者が語っていたことを思い出す。太陽はその運行を止めないように、教育の現場にあってもたゆまぬ努力が必要となるのである。筆者は最近教育についてこのような考えを抱きつつある。

その考えに行きつくのに時間がかかった。ここで、筆者が今までどのような教育実践を行ってきたかを述べることにしたい。主に行ってきたものは2つある。1つはJACE Tが開発した聴解能力テストの実施及びそれに伴う教室でのヒアリングの訓練である。他は感受性を高めて語学の学習の動機づけを与える指導法である。

現在大学での教授法の大部分は訳読方法と言って差支えないであろう。しかも、これが大学生の英語の授業に対する不満の最大のものであると、様々の調査で分かっている。そこで私は他大学である年、この教授法を止めて、聴解能力を養成しようと、それに合ったテキストを選び、又、ラジオの英語の海外放送も取り入れてみた。生くらの聴解能力では役に立たないから、徹底的にその放送の内容が分かるまで、反復して聞かせた。成程、英語を耳を通して理解することは難しい。少し注意をそらしたり、又、語る者が不明瞭な発音で話すと、もう理解ができなくなる。母音を一つ聞き逃しても理解に達しない。詳しく、語る余裕がないが、このように徹底して聴解訓練して1年が過ぎた。私自身の学生への評価は思ったほど悪くはなかった、という例は数名に限られ、ほとんど充分力を養えたかどうか疑わしい。中には優秀な学生がおり、私も驚く程立派に理解していた。しかし、ほとんどといってよい位、英語の耳からの理解は困難なままであった。学生の私に対する反応も又悪かった。こんな嫌なクラスはもう御免だ、というのが一致した気持であったであろう。これは、学生が求めているような授業ではない。この理由として考えられるのは、聴解能力を高めるためには学生が年を取り過ぎて一学期に歳はない、と言うが一知的な満足が得られず、ただ苦しむだけである、ということがある。聴解能力の養成は一鉄は熱いうちに打て、とあるように一中学、高校時代にその基礎は終えておるべきである。この時代においては学生・生徒は訳読方式（高校の英語の授業の主流の教授法ときく）のみによる授業よりも聴解能力をも併せ養う授業に十分楽しんで参加する根拠は大いにある。聴解能力の訓練はスポーツの練習のようである。野球を全くやったことのない者が大学でいきなり野球の練習しても出来ないのと同様、年少の頃から聴解力の基礎をつけるべきである。特に大学生になると、知的な刺激の少ない音声訓練—しかも、第2外国語のように新しく学ぶ言語でなく何年も学んできている英語であるだけにそれだけ—を嫌う。その上、外国語専攻の学生でないだけに（何も学部専攻によって学生を区別しているのではない）、語学そのものに興味を抱く学生は少ない。後に示すように、日本の全国大学生の聴解能力は甚だ低い。外国留学生が受験するTOEFL試験による英語力

は106ヶ国中、85番目で、アジアでは最低の西サモア、アフガニスタン、イラクと同等であったと言<sup>注8</sup>う。これらのことから、中学・高校段階において、教師が文部省の学習指導要領に基づき、これを十分に授業に生かすことが大いに望まれる。中学・高校の英語の教師はこの指導要領をほとんど読まないと言われているくらいだから、この点を強調してもしすぎることはない。大学入試・高校入試のための英語を教えるのではなく、むしろ、英語の自然な技能を養成すべきであろう。入試はそうにしても合格点は取れよう。不自然な受験英語はなくした方がよい。何も受験英語のすべてが不自然な英語と言っているのではない。

次に教える側に立って反省すると、まず、聴解能力の養成を主体にした教授法が現在、大学では皆無に近い。この目的に沿って、系統的に、或いは理論的に学生を指導することができない。悪く言えば、運営が行き当たりばったりになり、へたな漫才師に墮する危険がある。つまり、指導が教師の体験にしか頼らざるを得なくなり、指導の基準を模探しつつ進むことになる。この方面の教授法の開拓、理論化が切に望まれる。しかし外国の教材会社ではこの種の開発が行なわれ、テキストも発売されていると聞く。次に、学生の実力の差が、同一大学に於いても、開きすぎることが考えられる。英語によらず何事に於いてもそうであるが、一定の実力水準に達している者とそうでない者が同じ時間で同じ教室で同じ指導を受けるのであるから、非常に能率が悪い。話しはちがうが、英国の中等学校ではStreaming（能力別学級編成）が行なわれている。大学においても、何らかの理由で学生の労力の開きが大きすぎると、この編成をとらざるを得なくなろう。ある学生に理解させる時間が他の学生にはその2倍も3倍もかかる。一定の段階を立てて授業に臨んでも、手元から狂ってくる。学生1人1人の実力を知る資料も与えられていない。この点、この種の指導法は困難と思える。ここで断って置くが、聴解能力の養成とは、テープを数回一斉に流してそれで終りといのではない。ある程度の内容を持つ英語を口頭又は録音テープで聞かせて、その内容が正確に理解できたかを問い、それが完全にできるまで進まない。個人差が大きいから、ある学生はぼかんとして少しも理解できない。ある学生はどうか半

分位理解する……といった具合である。

話を元に戻すとしよう。今日大学生が訳読方式について感じていることが常に正しいとは限らない。教える側にもより大きい反省が必要であるが、学生の側にも学習の仕方を反省する必要がある。数え方、学び方が正しく呼応し合って始めて効率のよい授業を創造し得る。訳読方式に不満を持つ者がその他の方式でその不満が解消されるとは限らない。更にもっと不満が生じるかも知れない。一番いけないのは教師・学生共々努力をしないことである。一方がそれを欠いてもうまくいくはずがない。今、あのクラスの学生達がどのように伸びてくれたのか、何ともなかったのか、或いは逆に効果がマイナスになったのかどうか気になるところである。

其後、筆者は再び訳読方式に帰っていった。聴解能力は耳から実際に物理的音声を通さなくとも目で読んで理解しても養成される。つまり、“acoustic image”によって実際音声聞いたのと同等の能力が養われる。従って、訳読方式をうまく用いれば、英語の能力の大半は十分、養えるのである。しかも、読むことによって理性が高められる。この理性（知性）の養成も訳読方式の大きな収穫であろう。（断っておくがこれは筆者が他大学で行った実践記録である。）

次に J A C E T の聴解能力のテストの結果を公表してみよう。

第 1 回（1981年12月） A 大学 1・2 回生

評 価 区 分

合 格	不 合 格		
Excellent	Good	Fair	Poor
120-100	99-60	59-20	19以下
A	B	C	D

評 価 分 布

A	B	C	D
120-100	99-60	59-20	19以下
3.5%	20.5%	40.8%	35.2%

N = 54899

過去 5 年間（10回）の総人数 54899 名，Techical Manual (Kaitakusha)，p. 18 による。

<A・ダイガクHISTOGRAM>

{A}

0	120=	110	
0	109=	100	
0	99=	90	
0	89=	80	
0	79=	70	
2	69=	60	*****
2	59=	50	*****
3	49=	40	*****
7	39=	30	*****
18	29=	20	*****
25	19=	10	*****
23	9=	0	*****
21	-1=	-10	*****
7	-11=	-20	*****
4	-21=	-30	*****
1	-31=	-56	****

SCHOOL N=113 MEAN=10.0 SD=18.5 \*=0.25

94	120=	110	*****
180	109=	100	*****
325	99=	90	*****
467	89=	80	*****
639	79=	70	*****
767	69=	60	*****
921	59=	50	*****
1003	49=	40	*****
1272	39=	30	*****
1427	29=	20	*****
1644	19=	10	*****
1463	9=	0	*****
1047	-1=	-10	*****
477	-11=	-20	*****
117	-21=	-30	*****
25	-31=	-56	**

TOTAL N=11868 MEAN=31.9 SD=31.0 \*=16.44

DECEMBER, 1981

## ＜コクリッダイガク＞

YEAR	H			S			E			O			TOTAL		
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N
1	34.8	28.0	119	38.2	26.4	164	63.8	28.0	21	14.9	12.6	9	38.0	28.0	313
2	42.7	34.4	74	28.4	32.0	116	60.0	26.0	48	19.0	22.6	22	37.5	33.6	260
3	50.9	24.7	14	30.1	32.0	14	82.7	27.5	47	33.7	19.7	6	64.5	35.3	81
4	0.0	0.0	0	8.0	0.0	1	67.5	32.9	16	92.0	18.0	2	66.9	34.6	19
5	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0
6	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	54.0	45.7	3	18.0	14.0	2	39.6	40.5	5
	38.7	30.7	207	33.9	29.4	95	69.3	30.1	135	23.8	25.8	41	41.8	32.9	678

## ＜コウリッダイガク＞

YEAR	H			S			E			O			TOTAL		
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N
1	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	57.1	26.2	85	0.0	0.0	0	57.1	26.2	85
2	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	44.1	28.9	137	0.0	0.0	0	44.1	28.9	137
3	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	14.8	30.7	13	0.0	0.0	0	14.8	30.7	13
	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	47.2	29.8	235	0.0	0.0	0	47.2	29.8	235

## ＜シリッダイガク＞

YEAR	H			S			E			O			TOTAL		
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N
1	35.0	34.2	778	10.8	21.9	1243	37.4	28.5	1152	15.5	25.0	186	25.8	30.3	3359
2	9.0	20.7	473	23.3	23.2	115	47.5	29.6	853	14.6	19.9	134	31.4	31.5	1575
3	31.9	26.0	69	0.8	16.4	5	59.0	27.9	538	21.7	24.5	22	54.3	29.8	634
4	47.5	23.6	26	18.5	24.8	4	49.8	32.5	126	10.8	15.3	13	45.7	32.1	169
5	26.0	19.5	8	36.0	2.0	2	65.1	27.2	9	28.2	23.7	18	37.1	28.1	37
	26.0	32.1	1354	11.9	22.3	1369	45.6	30.1	2678	16.0	23.1	373	31.1	31.9	5774

<Aダイグク・HISTOGRAM>

[C]

0	120=	110	
0	109=	100	
1	99=	90	***
0	89=	80	
3	79=	70	*****
6	69=	60	*****
6	59=	50	*****
11	49=	40	*****
17	39=	30	*****
29	29=	20	*****
32	19=	10	*****
24	9=	0	*****
15	-1=	-10	*****
16	-11=	-20	*****
5	-21=	-30	*****
1	-31=	-56	***

SCHOOL N=166 MEAN=16.8 SD=23.7 \* =0.32

128	120=	110	*****
249	109=	100	*****
380	99=	90	*****
518	89=	80	*****
612	79=	70	*****
705	69=	60	*****
828	59=	50	*****
1033	49=	40	*****
1260	39=	30	*****
1389	29=	20	*****
1559	19=	10	*****
1435	9=	0	*****
979	-1=	-10	*****
477	-11=	-20	*****
171	-21=	-30	*****
57	-31=	-56	***

TOTAL N=11780 MEAN=32.6 SD=32.4 \* =15.59

JUNE, 1982

〔D〕

## 第2回（1982年6月）

## 〈タンキダイガク〉

YEAR	H			S			E			O			TOTAL		
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N
1	24.9	16.3	7	0.0	0.0	1	24.1	26.3	2198	8.3	16.7	149	23.1	26.1	2355
2	30.2	28.9	139	7.5	15.5	79	38.2	29.3	2204	9.7	17.2	50	36.2	29.5	2472
3	34.3	26.5	6	0.0	0.0	0	61.1	25.6	11	0.0	0.0	0	51.6	28.9	17
4	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	14.0	16.0	2	0.0	0.0	0	14.0	16.0	2
	30.1	28.3	12	7.4	15.4	80	31.2	28.8	4415	8.7	16.8	199	29.9	28.7	4846

## 〈コウトウガッコウ〉

YEAR	H			S			E			O			TOTAL		
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N
1	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0
2	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	69.1	23.0	149	69.1	23.0	149
3	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0
4	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0
	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	69.1	23.0	149	69.1	23.0	149

## 〈ソノタ〉

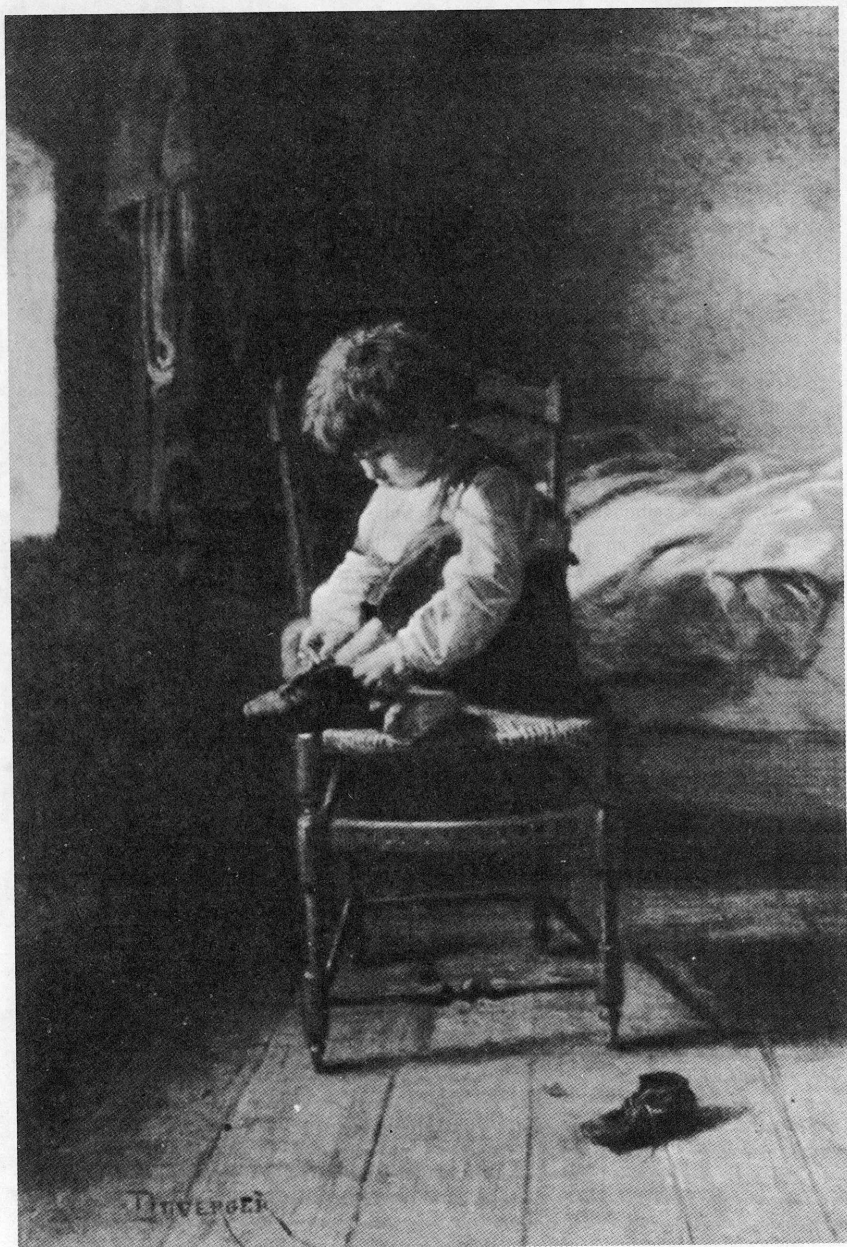
YEAR	H			S			E			O			TOTAL		
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N
1	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	27.4	27.3	48	27.4	27.3	48
2	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	29.1	24.5	47	29.1	24.5	47
3	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0
4	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	22.4	25.2	91	22.4	25.2	91
	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0	25.4	25.8	186	25.4	25.8	186



(結果は、様々の要因が考えられるけれども、誰が見ても低い一言に尽きる。)

筆者も大学の英語教育について理念を持たないのではない。当然のことながら、でき得るならば、授業もほとんど英語を用いて、語学の力も教養も養いたい。(その位の英語能力はある、と敢えて自負しよう。)しかし、現状はどうか。教師はさしおいて、学生の語学力の低劣さが(断っておくが、これは一般的に言っているのである)この理想を妨げている。いくら教師が持ち得る最高の力で以って、よい内容を伝えようとしても、学生の学力がそこまで及ばないならば教育効果はマイナスである。学生の力に迎合して、学生を甘やかしておくか、適当に学生を放っておくか、このような誘惑をはねつけるために、筆者は学生の全体的な能力—をも文科系の学生であり、筆者自身も文科系出身であるので、感受性—を引き出すための英語教育なるものを考えて実践している。

この教授法—とでも言い得るならば—の目的は学生の語学的力を養う前に、まず、人間のより本質的な問題を与えて、それを解決した上で、語学的素養を与えるというものである。この教育目的に基づいて、筆者は自分なりに、独特なテキストを作成した。まずその見本を写真版で見せる。



## Lesson 4

### ALONE

By THÉOPHILE EMANUEL DUVERGER (1821-1894)

IN THE GUILDHALL ART GALLERY, LONDON

Duverger began his career as a decorative painter, but his instinct led him to take up the little *genre* pictures with which his name is now associated. His first marked success was attained in 1853, when he made his appearance in the Salon where his work was to appear so regularly afterwards. He possessed the gift of acute observation, which is reflected in his paintings. The homely incidents which he depicts are full of the simple interest of familiar scenes which is associated with the *genre* paintings of the French, as well as of the Dutch and English schools. The merit of his work lies in its appeal to the sentiment of the spectator, by reason of its quiet humour or pathos, and in the refined treatment and rich colouring which are characteristic of the artist.

Duverger's favourite style of subject is well shown in "Alone," as well as in "The Labourer and his Children" in the Luxembourg, and in such pictures as "A Visit of Charity" in the Walters Art Gallery, Baltimore. His work is not so well known in England as it deserves to be, but "Alone" is a thoroughly representative example. It is a small picture, ten by seven inches, and shows a small boy, seated on a chair, trying to fasten his shoe. The child's pathetic loneliness, which is emphasised by his valiant efforts to control his feelings and succeed in his task, is well expressed, while its strong appeal to the child-lover is none the less poignant because of the simplicity of the subject. The detail shown by the painter, and the subdued harmony of colours, combine to make the picture worthily representative of the French *genre* school to which it belongs.

- 1) この絵を見たままの素直な感情を記してみよう。
- 2) *genre* painting とは何か？

世界の名画を左頁に、英語で書かれたその絵の説明文を右頁に置き、それについて日本語で設問を設けてある。今日、市販されているテキストには絵が多く漫画時代の学生に合うように特別に（？）配慮されている（？）。筆者の場合はそれと異なる。絵といっても、世界の一流の古典的芸術作品で、それを見る学生には高雅な感情を心に喚起させる。この高調した感情を引き出すこと、そして、その高みにおいて、英語を教える。このようにすれば、英語学力の低い学生でも、英語学習そのものに意欲が湧き、興味と情熱を以って、授業を受けることになる。一部の騒しかったクラスも静かに熱心になる。この授業法は低いレベルの学生にも高いレベルの学生にも効果的で学生達も教師に対して信頼を寄せるようになった。（この授業法は今でも続いていて、成功している。）

実際のテキストの用い方を説明する。まず、授業時間の20分位を割いて、絵の鑑賞文一小エッセイを日本語で書かせる。レベルの高いクラスには英文で書かせてもよい。筆者は日本語で書かせた。この時に、論文の書き方を教える。この時間は忙しい教師にとって、貴重な時間となる。次回からは、この時間に、学生達が提出した小論文にA・B・C・D・のランクを与える作業に費すことができる。Aには5点、Bには3点、Cには1点、Dには0点を与え、学期末に集計して学生夫々の平常点にして、テストの一部に操り込む。このようにすれば学生は自然と熱心に書く。次の作業は普通の訳読方式に沿って右頁の英文を読んでいく。設問は特別のクラス以外はやらない。

実際、この小論文の課題はこの教授法に測り知れない意義を与える。まず、学生の側にして見れば、1. 絵画を通して高い感性を養うことができる。2. 思ったことを論理的に考え、文章を書く能力を養うことができる。3. 更に、熱心に書けば書くほど、よい評価点が加算されるからよけい楽しくなる。次に、教師の側から見れば、1. 学生が書く内容から、彼らが何を考えているかが分かり、それによって、学生への尊敬の気持が生じ、教師自ら、学生の前に謙虚にならざるを得ない。2. 文章の書き方、その内容から学生の人格や知的・感性的に優れた点を読み取ることができる。実際、このようにして発見された優秀な学生もいる。毎週、この作業を繰り返すと、知らず知らず、

教師と学生達との間に意志や気持が交流して、教室の雰囲気がよくなる。ここで、筆者が見出した最も優秀な学生の文章の一部しか紹介できないのは残念である。この文章は先に見本にあげた絵に関するものである。

## Lesson 4

……何でもない生活の一風景にすぎないが、主題が単調である故にさまざまなイメージが広がり、とどまるところを知らない。子供というものはまだ大人のような邪心がなくて、その動作の一つ一つに天使が宿っているように見える時がある。それは分別がつかない故の無邪気さかも知れない。いずれにしても子供の持つ美しさを如実にやさしく表現している。

何故、この教授法がよい効果を生んだかを考えてみよう。一般的に学生が習ぶ英語には、その英語が表現する内容と学生との間に共通するもの、必然性がない（尤も、クラスと教材を特に厳選すれば話はちがうが）、つまり、英語が表現する内容と学習者とがかけ離れ、融合されていない。従って、その場合、学習者は無理に内容を無視して、とにかく、英語が分かるようにする。これでは英語の学習が面白くなるのは当然のことであろう。特に英語の力が低い者は授業中に遊ぶことになる。もし、学習者とその教材の内容との間の結びつきを密にすればつまり、融合させる一、学習者は内容それ自体に興味を持ち、少なくとも遊ぶということはなくなる。その興味も決して低俗なものでなく、むしろ、人間の高度の、全体的な精神を引き出すものであれば、学習者の人間性をよりよいものへと養うことになる。

このように、人間性の養成に基づいて、語学の芽を伸ばすことができる。英語教育を通して（狭い意味での）、教育を与えるのではなく、まず、人間性を高めて外国語を教授する。前者では、外国語学力の低い者は人格までも低く考えられ、後者においては、人間性が外国語に優位するから、前者の如き誤認識はなくなる。筆者が毎週、何百と読む文章がそれを証明する。

このような英語教授法は目先のきくものでないかも知れないし、あるいは、そうであるかも知れない、一たとえば、この教授法によって、落ちこぼれか

けていた学生が、ある時から急に元気が出てきたのを目撃したことがある—しかし確かなことは、学習者の人間を高め、長期的に見て、価値のあるものである。これこそ、筆者の目的とする英語教育の理念に一致する。

## お わ り に

右に述べたこと以外に語ることがまだ残っている。しかし、それは他日に譲ることにしよう。筆者は考える、大学の外国語（英語）教育は現場で実際にその任務に当たる者に任されている、従って、その主体性を見失わず、全国の、あるいは世界的視野から、現場での教育の指針を定める必要がある。今日、我が国の大学の外国語教育は、ややもすれば個性のない、（敢えて言うが）、おおむね教材会社のテキストに左右されがちである。各大学の個性に合った理想的外国語教育と創造するには、やはり、大学自体の外国語研究所を所有して様々の制度や教育内容などを研究して、今後の百年の計に沿った体制を生み出していかなければ、少なくとも外国語教育の進展はなからう。（既に外国語教育研究所をもつ大学はいくつかある。）

以上、英語教育学者の目から見れば粗論、識者の目から見れば愚論を述べ、恥をさらしたようである。しかし、他方この中に何か、汲み取っていただけるものの一かけらはあるだろう、と敢えて自負したい。

——1983年3月9日 研究室にて——

## 【付記】

この論文は本文にも書いたように本学通信教育部発行『鷹陵』第97号（昭和58年5月）に発表した拙論「英語教育私観」を敷衍したものである。この試論を敢えて公にするのはJACET関西支部長、安藤昭一京都大学教授が本文原稿を御校閲して下さい、かつ、これを発表するように力づけて下さったことによる。このことに対して筆者は安藤教授に心から厚く感謝するものである。

1984年9月8日

## 注

- (1) たとえば、南カルフォルニア州大学のRobert B. Kaplan（当日の講演者の1人）は中華民国の例として次のようにある調査結果を報告している。
- ① most teachers perceived their knowledge of English to be inadequate;
  - ② most teachers actively sought in-service training opportunities and found those offered by the ministry of education to be inadequate in number, in frequency, and in content;
  - ③ most teachers were unhappy with the textbooks they were required to use;
  - ④ most teachers were uncomfortable with the methodologies most commonly in use, but didn't feel that they know enough to modify methodologies independently.
- (Robert B. Kaplan, "Lectures in Applied Linguistics and Related Topics," *Supplement to English Teaching*, No. 24 (1982), *The Journal of the College English Teachers Association of Korea: The Proceedings for the Second International Conference in Seoul, July 27-30*, p. 318. (以下これを *Proceedings* と略称する))
- (2) 様々の教授について同氏は次のように語った, "It is rarely a question of an either/or choice—of choosing one anything to the exclusion of all others. All of these choices I have enumerated (and probably a lot of others) are useful, in some place, at some time, in some set of circumstances. If we define out objectives carefully and realistically, then it becomes a relatively easy matter to choose from among the available alternatives an appropriate methodology, an appropriate starting point, an appropriate curricular model (*ibid*, p. 326).
- (3) 彼は次のように述べている "Conclusion: Grammar is not the goal of language teaching. However, it can serve as a short-cut to that goal if it is wisely taught. This is especially so in the case of Korea's English education. In order to enrich the contents of pedagogical grammar we must tap some useful linguistic findings into the modern school grammar of English. However, its foundations or layout must come from traditional grammar and no other grammars can take its place." (Chae Joon-Kee, "In Search of an English Grammar for TEFL," p. 4).
- (4) ジョン・B・キャロル著・大学英語教育学会編・訳注『英語の評価と教授』（大修館, 1972年）, 69-71頁による。
- (5) 女史の講演は *The Proceedings*, pp. 223-239 に掲載されている。

- (6) Rhoda Curtis, *op. cit.*, pp. 227-28 による。
- (7) 現職教員の再研修については『英語科教育の研究』(大修館, 1972年), 382-6頁を参照。
- (8) 松本道弘氏の言葉による。Cf. *How to Take Standardized Tests* (ELS), p. iii.